勤労学徒の写真発見

「本校は巨大軍需工場跡」続報

本紙ではこれまで、太平洋戦争中に本校の敷地付近で操業していた巨大軍需工場「田辺航空工業」について調査し報道してきた。第２号では工場が米機により空襲を受ける様子の写真を掲載したが、その写真は、米機からの撮影で工場の外観もわずかにしか分からなかった。しかし、今回、戦時中に田辺工場で勤務されていた吉峯睦子（旧姓＝海江田）さん（90）から当時工場内で撮影された写真をお借りすることができた。軍事機密に包まれた当時の様子を知る貴重な２枚を、証言とともに紹介する。

（写真１）田辺工場に報国隊として勤務した初日に行われたハンマー打ち訓練の様子。中央が吉峯さん。１９４４年（昭和19年）１月。

私は、県立二高女（現県立甲南高校）五年生の三学期から、報国隊として田辺航空工業で働くことになり、卒業してからも挺身隊として働いていました。私は鹿児島駅から通勤していましたが、朝の谷山方面行きは田辺で勤務する人たちで大混雑し、まるで「田辺列車」のようでした。谷山駅から工場までの道も、挺身隊や工員の方々で前を追い抜けない程の人の波ができていました。

広い工場内では、週一回の朝礼があり、そのときには田辺健吉社長がいつも感動的な話をされていました。今でも力強い良いお声が耳に残っています。

この写真は動員初日に私がハンマー打ちの基礎訓練をしている写真です（写真１）。誰が撮って下さったかは覚えていません。写真ではモンペに横線二本入りの三角ずきん姿ですが、二高女を卒業して挺身隊となってからは工員の薄紫色の帽子を被りました。この訓練を数日間した後、私は技術課の原図部に配置されました。もう一枚の写真は、報国隊の原図部の仲間と二高女の卒業の際に撮ったものです（写真２）。おそらく原図部の建物の前でしょう。

原図部の入っていた建物は木造平屋建てで、そこではベテランの工員の方が四、五人と、私を含めた女性が五、六人働いていました。ここでの仕事は、カラスロと呼ばれる製図用のペンを使い、ベテランの人たちが作られた設計図を写していくというものでした。小さくて何が何やらわかりませんでしたが、水上機のフロートの部品であったと思います。学校では習ったことのないカラスロを使う仕事なので、慣れるまで大変でした。挺身隊、報国隊時代に、田辺でお給料をもらったかどうかは、私は覚えていません。しかし、時々工場側から黒砂糖が配給されることがあり、それが嬉しかったです。私は昭和二十年の四月に退職しました。

戦況がだんだん悪化していくと、時には空襲警報があり、防空壕まで走り続けることもありました。鹿児島が最初に空襲された日は、電車も汽車も不通になり、谷山から朝日通りにあった我が家まで歩いて帰りました。その途中、鴨池の航空隊（鹿児島海軍航空隊）が燃えるのを目にし、我が家は大丈夫だろうかと不安で胸がいっぱいになりながら急いで帰りました。その日被害を受けたのは平之町方面で、我が家は大丈夫でしたが、私はいつ死ぬかわからないとの思いから遺言をノートに書き、自分の机の引き出しに入れて翌日また田辺に通いました。

しかしその遺言ノートも、六月十七日の空襲で我が家が焼けたときに幻となりました。その日は二中（現県立甲南高校）の弟が長崎から帰ってきていて、その夜に空襲がありました。夜なのに昼間より明るくなり、そのうち空襲警報が鳴り出したのです。自分の部屋に火がつき、当時は「自分の家で火を出すと非国民」とされていたので消火をしようとしましたが、煙に巻かれてしまい「もう死んでしまう」と覚悟しました。しかし、主人が助けてくれてなんとか家を出て防空壕に避難することができました。九十年間生きてきて、あんなに長い夜はありませんでした。

しばらくしてから、市比野に父の友人を頼って疎開しましたが、食糧不足で本当に苦労しました。ご飯といっても、白米ではなく雑炊です。まさに最低限の生活でした。戦後もいろいろ苦労しましたが、市比野での生活を思えば、今は食べ物があり、電気や水道もあってありがたいと思います。あの生活を切り抜けたからこそ、まだあの時に比べればとの思いで頑張れました。戦後七十一年の歳月が過ぎ、時代の変化にただ驚いています。

色あせず敗戦の日はめぐり来て青春の日々痛みは深し

敗戦の悲しき午後の蝉しぐれ幾年経ても涙かわかじ

よしみねむつこ
吉峯睦子さん(90)
南さつま市加世田在住

田辺航空工業株式会社（たなべこうくうこうぎょう）

１９４３年（昭和18年）より現在の鹿児島市西谷山1・2丁目、谷山中央８丁目（現在の山中の善き牧者幼稚園、鹿児島南高校、谷山中学校付近）で操業を開始した巨大軍需工場。

本紙第２号で「本校は巨大軍需工場跡」として工場が空襲を受けるスクープ写真とともに報道した。

同工場は、工場・社宅敷地合わせて２万余坪、従業員５千人超の南九州最大の軍需工場であり、航空機部品を造り、大村海軍工廠（かいぐんこうしょう）（長崎県大村市）に送っていた。主翼・機体などの多様な部品製造の中で特に零式水上偵察機のフロート（水上で離発着するための舟型の浮き）は国内最大の生産量を誇った。

鹿児島南高校の敷地は当時社宅第２区だったと考えられる。千人を超える10代の勤労学徒、養成工も勤務した。

本紙第７号では、戦況悪化の中、旧制大口中学校と大口高等女学校（両校とも伊佐市大口、現県立大口高校）に疎開工場が設置され、生徒たちが部品製造に従事していた様子を明らかにして報道した。第８号では、その疎開工場の工場長のご息女の証言を紹介した。

鹿南タイムズでは軍事機密につつまれた工場の全容解明に向けて平成25年度から調査活動を続けており、今年度で４年目。今後も、当時を知る方の証言を積み重ねて、史実を明らかにしたいと考えている。

（写真２）県立二高女（現県立甲南高校）の卒業時に報国隊の原図部の仲間と撮影。工場の技術課の建物前か。写真左端が吉峯さん。台紙に「昭和19年２月29日，19才」の記述あり。この写真の公開は本紙が初。

論説

オバマ大統領広島訪問
核廃絶への動きにつなげよう

５月27日、主要国首脳会議（伊勢志摩サミット）終了後、オバマ米大統領が被爆地、広島を訪問した。これは現職の米大統領として初めてのことだった。オバマ氏が平和記念公園に到着し、まず訪れたのは広島平和記念資料館。約15分後、厳しい表情で資料館から出てきたオバマ氏は、その後、献花し原爆の犠牲者と第二次世界大戦で亡くなった全ての人々に祈りを捧げた。続いて戦争の悲惨さと「核兵器のない世界」を将来にわたって追求する必要があると訴えるスピーチを行った。

「71年前の雲一つない晴れやかな朝、死が空から降り注ぎ、世界は変わってしまった」と原爆投下の日に思いをはせながら百人余りの被爆者にゆっくりと語り始めた。スピーチの中でオバマ氏は戦争と核兵器の悲惨さを語り、核兵器保有国として「我々のように核の備蓄を持つ国々の間で、核兵器が完全に廃絶される世界を求め、恐怖の論理から脱却する勇気を持たなければならない」また、「自分たちの戦争そのものに対する考え方を変え、始まってしまった紛争の終結を目指さなければならない」と核廃絶に対する再認識と、戦争のない平和な世界の実現を訴え「核なき世界」を主導していく決意を示した。

スピーチ後、オバマ氏は招待席の最前列の日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の代表者の一人、坪井直（すなお）さん（91）にゆっくり歩いて近づいた。坪井さんはオバマ氏と握手をし「原爆を投下した米国を責めてはいない」「これからも時々広島に来て」とオバマ氏に話したという。この言葉を聞いたオバマ氏は握手する手に力を込めたという。「（核廃絶への）第一歩として評価したい」と坪井さんは振り返る。

確かにオバマ氏のスピーチや行動に感動した人も多いのではないだろうか。今回の訪問は現職大統領としての大きな決断であり、高く評価できる。しかし、坪井さんの言葉にあるように、やはり核兵器廃絶に向けた「第一歩」であるといえるのではないか。今回の訪問では、オバマ氏から原爆投下に対する謝罪はなかった。日本被団協の事務局長の田中熙巳（てるみ）さん（84）は24日の記者会見で「核廃絶が前進するのであれば、（謝罪は）我慢する」と述べたという。戦後70年が経過し、原爆の惨禍を体験した被爆者として、「謝罪」も大切だが「核廃絶への歩み」をより重視したいという思いが伝わってくる。

オバマ氏の今回の訪問の真価が問われるのはこれからではないだろうか。オバマ氏はもちろん、米国の今後の動きこそが大切だ。それは、オバマ氏が核兵器を世界から無くすための力強いリーダーシップをとることであり、米国がそのための具体的な行動をとれるかどうかを注視したい。